

十七世紀フィレンツェにおける「展覧会」

ーサンタントニオ・アバーテ・ディ・ノッテ同信会の事例をもとに

坂本篤史（神戸大学大学院）

F・ハスケルは、美術作品を借り出して展示する、今日的な意味での「美術展覧会」という行為が、十七世紀前半のローマにおいて頻繁に見られることを示し、また、それらが美術作品の市場に及ぼした影響について述べている。一方、ハスケルの研究をもとにしたF・ボッローニ・サルヴァドーリの体系的な研究から明らかのように、フィレンツェにおいては、アッカデミア・デル・ディゼーニョが主導となって、少なくとも一六七四年以降、聖ルカの祝祭の日に美術品を陳列するという、現代の展覧会のさきがけといえるものが行われていた。

しかし、十七世紀フィレンツェ派の研究史においては、同信会員による美術作品の注文、貸出、装飾の行為は、十七世紀前半のフィレンツェの習慣であった（PAGLIARULO 1989）。この場合、制作された作品は、通常、連作（主題のほか、形状、寸法が共通）であった。美術作品を貸出す行為は、現在の展覧会と共通するが、作品が宗教的機能を担っていた点（祈りの道具）を考慮すると、近代の展覧会とは一線を画すといえる。

本発表では、この種の事例のひとつとして、N・ポンスが二〇〇九年に紹介した史料をもとに、フィレンツェのサンタントニオ・アバーテ・ディ・ノッテ同信会（以下、聖アントニウス同信会と略す）が開いた「展覧会」について考察を加える。おそらく十八世紀の末に執筆されたと思われるG・B・デイが記した覚書によれば、この同信会員十二人は、聖アントニウスの生涯を表した八角形の形状をした絵画十二枚を画家たちに注文し、祝祭の日に作品を同信会の活動拠点に飾っていたという。ここで、注目すべき点は、これらの作品は、通常注文主が保管していたが、同信会の求めに応じて、彼らに貸し出されたという点である。所有権が注文主に属しているため、作品は「譲渡」されるのではなく、あくまで「貸出」という形式を取る点は、現行の展覧会における企画展に通じるものがある。この覚書には、注文主の氏名については記されているものの、制作に当たった画家、作品の主題のほか、作品の注文（つまり制作）時期に関する三点については、この史料から知ることができない。本発表は、これら三つの問題について検証していくものである。同時に、この同信会が一四九八年以降特別な信仰を寄せていたフランスの聖王ルイについても、会員たちはその生涯を表した絵画連作を注文し、同様の形式で展示していた可能性があることも指摘したい。

本研究は、十七世紀フィレンツェ派の研究者の中で議論されてきた同信会の絵画注文の事例、および近年新たに発見された史料に基づいた聖アントニウス同信会の事例を再構成し、それを展覧会史という別の文脈の中に位置づけようとするものである。